

二月十五日。池の水に油のように、白く光るものが浮いている。鳩が水浴びをしたあとである。



今日は気温は低いながら、時々
曇のさす明るい日になった。桐の
木の下へ行ってみると、ヤブラン
の葉を敷いて、鳩が日なたぼっこ
をしていた。じつとうごくまっつ
ねむっているが、まるくふくらん
だからだが、ゆっくりと上下に伸
びたりちちんだりしている。

て、リュウノヒゲは、しゃごしゃごとして裏側へ巻き込んだように丸く重なり合っている細い葉を分けてみると、
ヤブランの黒い実は、穂が長く
葉の間から抜き出ているので、実
がこぼれやすく、もうその穂に残
っている粒は少ない。それに比べ

真つ青な実が、肩を寄せあうようにして隠れている。竜の玉である。

わたしがまだほんの幼いころ、竹でつぼりの玉にするために、男の子たちが竜の玉をさがしているのを、わけも知らずについて行った。皆の真似をして、手洗鉢のまわりをびっしりと囲んだリュウノヒゲを分けてみると、青く光るものがあってほんとうに驚いた。わたしの記憶のいちばん初めのものではないかと思っているが、その青い玉だけが鮮明である。

娘が二歳のころ、一粒のヤブランの実をみつめて、そつと口に入れた。食べてはいけないのでじつと見ていると、そのまま掌に出し、妙見堂の縁の板の上に置いた。両手ですくいあげ、ちよつとところがして眺め、また大事そうに両手をひろげてはさんでみる。しばらくそんなことをしていたが、いつか板の端からでもころがり落ちたのか失ったようであった。そのことを彼女が大人になった時、どんなかたちで思い出すのであろうか。

何時、なにに、どんな出会いをするかは、人の手で作り出すことのできない天恵とでもいうものかと思う。

毛 虫 一寺の秋 (6) 1

二月二十五日。昨晚のうちに、うつつらと雪化粧していた家々の屋根が、十時ごろ顔をのぞかせた太陽にすっかり気を許し、解けた雪が、音たてて樋を流れ下った。

やつと寒波も去ったかに見えたが、昼下がりにほり明るさは消えて、みぞれが降り、思い切り悪く冬は立ち

止まっているようである。

本堂の前を掃いていると、床下に近いたたきの上で、黒い毛虫が干からびていた。寒さを逃れようと最後の力をふりしぼってここまで来て、もうこれ以上耐えられなかったのであろう。骨がないから、死ぬとたちまち中みがしぼんで、毛ばかりがセメントの上で、風に吹かれている。

哀れを感じはするが、これが元気にもぐもぐと大急ぎに移動していたりすると、やっぱり踏みつぶしてしまったりするのである。緑色の体液が飛び散ると、ぎょっとして一瞬みぶるいする。「仕方がない。」と言いわけるが、どう仕方がないのか深くは考えない。その毛虫が、どの木の葉を食べ、どのような蝶、または蛾になるのかわからないものの方が多いからである。

気味の悪いものは、やみくもに殺してしまいがら、同じ地球上に生きる仲間にはちがいないが、と思ったりすることもあつた。

ゴキブリにいたつては、追っかけ、さがし出してでもやつつける。しかしこれも時には馬鹿げたことに思える。ゴキブリぐらいに大騒ぎをしなくても、戦後の混乱した時代には、多くの人がノミヤシラミをつけていた。当時の子ども達は、現代の子どもよりも、もう少し接近して遊んだから、学校では、女子全員の頭にDDTを振りかけ、手ぬぐいで頭を包んで家へ帰らせた。

今、DDTは有害として使用されていないようである。薬の害とシラミの害とどちらが、などと言う前に、両方の害を被つたことになる。

最近また子ども達にシラミが発生して騒いでいる。わたしも教室で子どもの頭を見なければならぬことがあった。養護の先生に、アルコールを浸み込ませた脱脂綿をひとつかみもらい、教室で子どもの髪を一人ずつ見る。一人ずつとアルコールで自分の指をふく。次の子どもの為である。

見た限りでは、シラミをつけている子どもはいなかったけれど、わたしがその時いた学校の教職員は、ほとんどの人が実際のシラミを知らなかったようである。見本だといって広口ビンに入れられたものが置かれていたが、わたしは見なかった。

こんなに大騒ぎして退治されるのだから、人間に好かれない生きもの達が、生き残るためにさまざまに知恵を働かせて、いよいよ強くなるうとするのも無理のないことである。 (一九八四年。カット・原田道子)

ラ

ー

ヴァ

ナ

ーランカーの岸辺で

(一一一) 原田 恵 雄

そのとき、ラーヴァナ夜叉王は、仏の神力で、如来の声を聞いた。ちょうどはがばが、海竜王宮を離れ、大海を渡ってしまって、ナユタ無量のインドラ・ブラーフマの王達や竜王たちに、とりまき敬礼されていたと
きに。

魏訳「爾時。羅婆那夜叉王。以仏神力。聞如来声。時。婆伽婆。離海竜王宮。度大海已。与諸那由他無量积梵天王。諸竜王等。匪遑恭敬。」

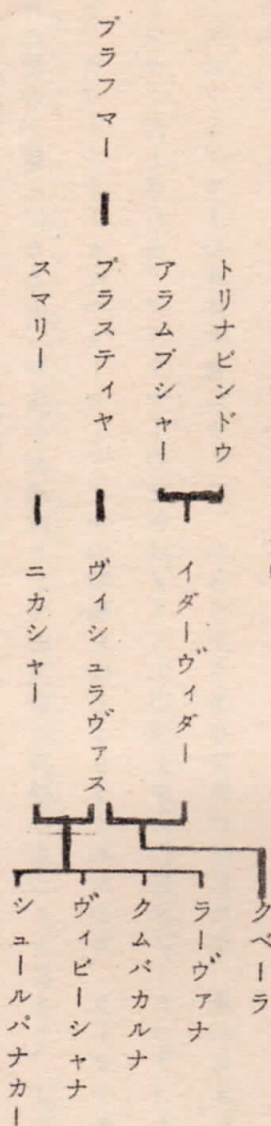
唐訳「爾時。羅婆那夜叉王。以仏神力。聞仏言音。遙知。如来。從竜宮出。梵釈護世天。竜。匪遠。」

梵文 *Asrausid Ravano rakasādhipatis tathagatādhi sthānāt — Bhagavan kila sāgaranāgaraja bhavanād uttīrya aneka śakra brahma nāgakanyaḥ kotibhiḥ parivṛtaḥ puraskṛtaḥ* . (ラーヴァナ羅刹王は、如来の神力により聞いた。——世尊は、きつと、海竜王の宮殿から出てくるのだろう。種々のインドラ・ブラフマ・竜女の百千のものに、とりまき尊敬されて。)

梵文には魏・唐訳の「爾時」と魏訳の「時」にあたる文字がない。魏訳の訳者の時間表現に対する周到な配慮を察することができる。また魏・唐訳が「夜叉」とするところを *rakṣasa* (羅刹) とあり、安井氏は *Yakṣasa* と訂正する。そうすればつきりはするが、訂正しなくてもよいのではないか、とも考えられ、理由は後に記す。魏・唐訳の「仏神力」にあたるのは *adhi sthāna* に「立脚点」がその原義である。ラーヴァナが如来の立脚点にたつことにより、ばがばの岸辺に立ちつぶやく声を聞いた、というのである。如来とラーヴァナが一つになることから生じた神秘的な現象である。見る者と見られる対象、聞く者と聞かれる対象が完全に一致同化している状態で、この *adhi sthāna* の解説が魏訳「集一切仏法品第三之二」(大正16、五三三頁、中) にあって「願力住持」といい、相当する宋訳は「神力」唐訳は「加持」で、ボサツが仏に頂礼し、質問し、三昧に入り、法を成就し、仏地に到達するのも、それがたとえボサツの自主活動の結果と見えようと、実は如来の願力によるのだ、というのである。だから、ここでもラーヴァナが聞いたのは、如来の聞かせようとする願力の結果だ、というのである。そうにはちがいないが、如来とラーヴァナの一致という瞬間が、ばがばの側からとラーヴァナの側からとの

二面の同時進行としてここに描かれている意味は没してはなるまい。

ここまでのばかばはは世間から見た「先生」であり、ランカーの世間シンハラの世界ではシンハラの世界ではシンハラのランカー侵略を正当化する「勝者」、ヤクシヤの征服者、追放者、であった。そのような立場にたつばかばはラーヴァナとは完全に敵対するもので、一致のしようはない。如来とラーヴァナの一致が成立するとすれば、ばかばが世間から見た「先生」であることをやめ、シンハラを侵略を正当化するシンハラの「ばかば」たることをやめ、ヤクシヤの征服者、追放者たる立場を放棄することによってでなければなるまい。それがここでの「如来の願力」であり、ラーヴァナの「如来の立脚点」にたつたことであろう。これ以後、魏訳に「婆伽婆」は出てこない。ここで、ラーヴァナについて考えておきたい。



右の系譜は、菅沼晃『インド神話伝説辞典』（一九八五年）から関りのあるものを抜いて組みたてた。伝承が一筋ではないから、この系譜と矛盾する記述もあるが、それは著者の責めには帰せられまい。以下、同辞典の説明を節略して。

ブラフマーは、ヒンドゥー教の三大神の一つ。ブラフマーが世界の創造を司り、ヴァイシユヌがそれを維持し、

シヴァ神が破壊するといわれる。ブラフマーは古くは非人格的中性原理としてのブラフマンで、ヴェーダにおいては神々をたたえる言葉（マントラ）やヴェーダ自体、およびそこに内在する神秘力をあらわす語としてもちいられ、ウパニシャッド時代に入り宇宙の根本原理とされ、神格化して男性神ブラフマーとして崇拜され、叙事詩では「世界の創造主」として神々の上に立つ最高神とされた。漢訳して梵天という。のち、ヴィシュヌ、シヴァ両神の信仰が盛んになると、宇宙の創造神としての役割は両神がもつことになり、ブラフマーの地位は相対的に下る。ヴァールミーキに「ラーマヤナ」の物語を作るようすすめたのも、ラーヴァナに強力な力を与えたのもブラフマーだとされる。ブラフマーの住居はメール山の頂上中央の都マノーヴァティーであるとされる。創造者としてのブラフマーの身体や意（マナス）からさまざまな神格が生れたが、意から生れたひとつがブラステイヤである。

ブラステイヤは創造主のひとりで、クベーラ、ラーヴァナ、ヴィシュラヴァスの父で、すべての羅刹は彼から生れたという。彼はまたブラーナ文献（伝説）をブラフマーから授けられ、バラトシヤに伝え、ブラーナが人に知られるようになった。

ヴィシュラヴァスはブラステイヤの子だが、ブラステイヤの生れかわりともいわれる。聖仙バラドヴァージャの娘イダーヴィダーとの間に富の神クベーラをもうけ、羅刹のスマーリーの娘ニカシヤとの間にラーヴァナ、クムバカルナ、ヴィビーシャナ、シユールバナカーをもうけた、という。イダーヴィダーは聖仙トリナビンドゥとアブサラス（水の精）のアラムブシャーとの娘とする説があり、ブラステイヤの妻となって、ヴィシュラヴァス

を生んだともいわれる。

ラーヴァナは、きびしい苦行とブラフマー神への帰依によって、神々やあらゆる悪魔に対して決して敗れることのない力を身につけていたが、女性に関することがらで死ぬよう運命づけられていた。十の頭と二十の腕と銅色の目と月のように輝く歯を持ち、その姿は雲か山のようにであった。ラーマ王子の妻シーターを奪い、ラーマに殺されたいきさつは既に述べた。彼の妻にマンドーダリーはじめ多くの羅刹女がいたが、彼の葬式に際しすべて焼き殺された。子には勇敢なインドラジッドのほか、ラーヴァニ、アクシャ、トリシラス、デーヴァインタ、ナラインタカ、アティカーヤなどの名が『ラーマヤナ』に記される。

クベーラは、クヴェーラともいい富の神。ヴェーダでは邪悪な存在の首長とされ、夜叉、グヒヤカ（密跡天）、羅刹のリーダー。九つの宝物の守護者といわれ、地中に隠された宝玉は時々クベーラによって人に示される。このことから宝玉の中（ラトナ・ガルバ）に住む財宝の主（ダナ・パティ）と呼ばれる。『ラーマヤナ』等によれば彼は非アーリヤ系の予言者ブラステイヤとバラドヴァージャの娘イダーヴィダーの子とされる。あるいは、バラドヴァージャの子のヴィシュラヴァスの子ともいわれ、この父方の名をとってヴァイシュラヴァナとも呼ばれる。『マハーバラタ』ではクベーラの母は非アーリヤンのムラの娘バドラーという女だとしている。彼の住居はヒマラーヤのアラーカで、夜叉女などを妻とする。ラーヴァナの兄弟としてランカー島を領有していた。数千年苦行し、ブラフマーから不死と護世神の地位と富、およびブシュパカという空中を自由に動きまわられる乗り物を与えられ、財宝の主となつたともされる。また、古くから北方を守護する護世神（ローカパーラ）とされ、仏

典でもドリタラーシュトラ（持国天）、ヴィルバーダカ（増上天）、ヴィルバークシャ（広目天）、ウアイシュ
ラヴァナ（多聞天あるいは毘沙門天、すなわちクベーラ）の四天王がそれぞれ東・南・西・北を守護すると説か
れる。メール山の第四層にあって仏の道場を守る、ともいわれる。多くの別名があり、クヌタ（みにくい身体
もの）ヤクシャラージャ（夜叉の王）マユラージャ（キンナラの王）、ラークシャセンドラ（羅刹の王）イー
シャサキ（シヴァ神の友）など。菅沼辞典からの引用はこれで了るが、ラーヴァナが兄のクベーラからランカー
とブシュバカを奪ったという伝えのあることを付加しておく。

さて「あらゆる羅刹は邪悪であったが、彼ヘラーヴァナはその中でも最も邪悪であった」と菅沼辞典にいう
が、これはアーリヤン、ことにバラモン教徒の見方であつて、非アーリヤンやバラモン教以外の宗教では別の見
方をする。岩本裕訳『ラーマヤナ 1』の解説によると、ジャイナ教の伝えるラーマ物語の一つである『パウ
マチャリヤ』には「羅刹たちが、その巨大な力にもかかわらず、猿軍に敗北したということは、どうしてそんな
ことが起こつたのだろうか。しかも、ラーヴァナを首領とする羅刹たちは、ジャイナ教の信仰によれば確かに高
貴の身分であるのに、肉を食つたといわれるとは、また、なんたることであろうか。それに、また、こんなこと
も言われている。ありとあらゆる妨害をしたにもかかわらず、ラーヴァナの兄ヘ弟クンバカルナは半年のあい
だ眠ってしまった。そして、目が覚めたあと象などを貪り食い、それから再び半年も眠った、と。また、さらに、
インドラ神は神々や人間を支配するにもかかわらず、ラーヴァナに捕えられ、ランカーに監禁されたといわれる。
そういう次第ならば、獅子が羊にやつつけられ、象が犬に負かされるということにもなりかねないだろう。こう

いうことを記す『ラーマヤナ』の物語は、まず間違いなく嘘である。」といい、ラーヴァナとその兄弟たちは苦行の力で大神通力を得たので、ラーヴァナを君主と仰ぐ羅刹たちは人食いの悪魔ではなくヴィティヤラ族へ空中の精の味方であり、ラーヴァナの母が贈った真珠の首飾りを彼がかけると真珠に顔が九度も映るので、「十の顔を持つ者」の異名をもつのであり、ラーヴァナは敬虔なジャイナ教の信者とされる。『パウマチャリヤ』は三世以後のものといわれ下限は明らかではないが、楞伽経と前後するのではなからうか。

五世紀以前に成立したとされる仏典『金剛の針』（中村元訳）には「ヴェーダによっても、また人はバラモンとはならない。何故であるか？　むかしラーヴァナという羅刹があつた。かれは四ヴェーダすなわちリグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダを学習した。羅刹どもの家々においても、ヴェーダに関する言動はたしかに現存しているのである。しかし、かれらはバラモンではないはずである。それ故に、ヴェーダによつても、また人はバラモンとならない、とわれわれは考えるのである。」という。このカースト否定論は、仏教徒はもとよりだが、バラモンを説得することを目ざしたものでらうから、バラモンの中で承認される事例しか引かれていないはず。それなら、ラーヴァナが四ヴェーダに精通し、その部下の羅刹の間でもバラモンに劣らぬヴェーダの知識のあつたことが周知されていたのらう。

H.A. ポブレイ『インドの音楽』（関鼎訳）に「ヘラーマヤナには、歌の名手であつたラーヴァナがヴェーダの賛歌を厳かに詠唱してシヴァ神の心をなだめるところの叙述がある」といい「ヴァイオリンの弓はインド人の主張によれば、五千年の昔いたといわれるランカー（セイロン）の王ラーヴァナが始めたものである」と述べる。

これらの記述を読むと、ラーヴァナは学問があり、芸術家であり、政治・軍事にもすぐれた大人物である。

『ラーマヤーナ』を読んだ感じからいっても、美德のかたまりのようにたたえるラーマは、夜叉女がラーマの弟に恋し結婚を申し込んだのがけしからんといつて夜叉女の鼻を削ぎとらせ、妻のシーターの貞操を疑い、疑いが晴れても世評を恐れて離別するといったつまらない男であるに對し、ラーヴァナは、シーターに恋し、ランカーに奪ってきて、おどしはしても、シーターの心がおのれに傾くのを待ち、暴力によつて貞操を盗みはしない。堂々としていて、ラーマのような、カウティリヤの実利論に見えるような、汚い姦策は使わない。それでもアーリヤ系のインド人、ただけではなくタイやビルマをはじめ東南アジアの諸国にこの物語が伝わり、そこでもおおむねラーマは正義の英雄で、ラーヴァナは邪悪の魔鬼なのだから、野球のファンだけでなく、衆団のフィーバー（熱病）が生み出す判断は、第三者には理解を絶するものがあるようだ。

ところで、「邪鬼」にしても「大人物」にしても、それは外からラーヴァナを対象として見た観察にすぎぬ。そう気がついてみると、ラーヴァナについて語られ・記されたすべては外からの対象としての観察ばかりであつて、ラーヴァナの立場に立ち、ラーヴァナ自身の感情・思考を聞こうとするものがなかつた。そのただひとつの例外が楞伽經（ただし宋訳はのぞく）なのだ。この經の特異な位置と価値が推測できようではないか。

早速、反論が出るかもしれない。それならラーマだつて、外から対象として観察されたものだろう、と。そう見えるかもしれないが、それはむしろ外見にすぎないのであつて、ラーマはインドのアーリヤンの立場のすべて、主観の一切がこめられている。すべてのアーリヤンは、ラーマの内におのれを見出す。おのれの願望を見出す。

だからラーマは「正義を知り、約束を堅く守り、人民の幸福をひたすら願ひ、……」とほめたたえられさえすればよいので、その行動の名声と背反することは、おのれの弱点を指摘されると同様のいらざるさかしらで、触れるべきことではないのである。

ラーヴァナは、邪悪だから魔であり鬼であるのではない。ラーマの敵対者だから邪鬼なのである。アーリヤンの敵対者は、敵対者であるが故に「邪悪」なのであり、「邪悪」なるが故に、アスラなのであり、夜叉、羅刹：であるのであって、アスラと夜叉と羅刹の間にいちおうの区別はあつても、たぶんあまり厳密なものではない。ラーヴァナが、同じ楞伽經の中で「夜叉」とよばれたり「羅刹」とよばれたりするのは、インド・アーリヤンの社会における見方や感じ方が反映しているためで、それをどちらかに統一することは、かえって正確さをそこなうことになるのではないか。

アーリヤン、あるいはアーリヤンの目で見る人たちに「夜叉」「羅刹」とよばれ、常に見られる「対象」でしかなかつたラーヴァナは、「対象」でしかなかつたために、見ることも聞くこともできなかつたはずである。いま、ラーヴァナが如来の声を聞く、ということとは、アーリヤンの目で見られた「対象」ではなくなつた、ということである。ばがば、アーリヤンの「師」である人、がアーリアンの目を捨てて如来のありのままに見る目で見るとき、即座に「対象」として見ることも聞くこともできなかつたラーヴァナの見る目、聞く耳がよみがえつた。』

8. そのとき、如来は観察した、衆生のアーラヤ識の大海の水波が、もろもろの境界の猛風に吹き動かされ、転識

の波浪は縁に随つて起こるのを。

魏訳「爾時。如来觀察。衆生阿梨耶識大海水波。為諸境界猛風吹動。転識波浪。随縁而起。」

唐訳「見海波浪。觀其衆会蔽識大海。境界風動。転識浪起。」

梵文 *saundra tarāṅgān* (南条本は *tarāṅgān*) *avalokya ālayavijñāno-dadhi pravṛtṭivijñāna pavana*

viśaye prertāṁstebhyaḥ samīparitebhyas' cittāny avalokya, (海の波動を見て、アーラヤ識の海の転識が、領域の風に動かされたために、もろもろの心が来集するのを見た。)

アーラヤ識は蔽識ともいい、旧訳では阿黎耶識・阿梨耶識、新訳で阿頼耶識と表記する。アーラヤは語根 *ā-* (執着する) からできた語で、原始經典にもすでに「欲求」「巢窟」の意で使われていることを月輪賢隆「小乘典籍に於ける阿頼耶」(一九二七年)が論証し、パーリ『増一經』四法品から「際ほとりなきわだつみのいと恐ろしき海原ぞ 宝千種の樓家なれ(または、いと恐ろしき海原に千種の宝、求めんと) 群れ人集ひあこがれて 流れ流れて行末は 小川の如くわだつみへ」を引いているのは、楞伽のいまのところの一つの源流を暗示するように興味ふかい。中村元氏は次のように説明する。「唯識説で説く最も根元的な識のはたらき。覆われて潜在している意識。心の奥底に蔽されている識。現にはたらきつつある識 (*pravṛtṭi vijñāna* 七識) が生じるための根底となり、基盤となるもの。根本識 (*mūla vijñāna*) ともいう。非可視的、非現象的で意識下の意識のようなもの。前の瞬間の心作用の印象(習気・種子)をたくわえ、次の瞬間の心作用をひき起こす。一切現象の直接原因である種子をうけこみ、それを自らに貯蔵する精神的原理である。アーラヤとは貯蔵所の意味なので、何か

実体的・場所的な解釈をひき起こしやすが、その本性は空であるという。唯識説では個人存在の主体、さらに輪廻の主体であり、身体の中に存する微細なものであると考えられている。「簡潔周到な説明でさすがと感嘆するが、はじめて読んだとき何のことかわからず、今だつてどれほど理解できていくか心もとない。しかし唯識説そのものがことに難解で、そのうえ六世紀中頃までと七世紀中頃以後では唯識説に大変化が生じ、そこらが学界でもまだ十分に整理されていないらしいのだから、わたしのような素人に納得のいかないのは、わたしのせいばかりでもないのである。しかし待つていてもわたしの命のある間にやさしくすっきりのみこめる説明が現われる保証はないのだから、少しづつでも自分で分るように努力するほかはない。

わたしたちが、見、聞き、かぎ、なめ、触れ、総じて知るばあい、その知られるもの、つまり対象がある。その対象を「境」とか「塵」とかいう。梵語の *viśaya* (領域・境地・境界等) の訳語のひとつ。 *jñeya* (知られるもの) の訳語としても使われる。自分の心であつても、知る作用であつても、対象化して考えるときには、その心も作用も対象だから境である。そのとき境となつた心や作用を知る主体としてのほたらきがある。そういう、いつでも主体としてあり、決して対象とはならぬ知る作用が出てくるもの、そのふしぎなものに名を与えたのが「アーラヤ識」なのだ。

だから一種の作業仮説といつてもよい。今日すでに日常用語になつた「無意識」とか「深層心理」といった心理学用語も、作業仮説から出たもので、実体としてあるわけではない。アーラヤ識ももとより実体はない。中村氏の説明したような性質のものが「アーラヤ識」なんだな、とうけとめておいて楞伽經そのものが加える説明を

聞きながら進んでゆけば楞伽經の示そうとする「アーラヤ識」のすがた(相)が見えてくるだろう。そうあることを願う。

梵文「海の波動」の「海」は *samudra* で「水の集積」だが、「アーラヤ識の海」の「海」は *dadhi* で「酸乳」である。*dadhi* は *da-dhe* からできた語で *dhe* は吸うとか飲むとかの意。すべてのものを飲みこみすべてのものを養う海とアーラヤ識の機能の同一性が示され、伝説でいう「乳海」ともつながっている。

転識は、外界の事物に対する認識。現にはたらいっている識。アーラヤ識を除いた、他の七つの識、すなわち眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五識と第六の意識と第七の末那識をいう。*pravṛtti vijñāna* の訳語。*pra* は前へ *vi* は転ずる、進む、ほとばしり出る、というほどの意。*vi* は分離、*jñā* は知る、だから *vijñāna* は、分析的、分類的な知識ということになる。

「ばがば」が海から上陸したとき、マラヤ山は、はるか彼方に金色に輝いた。「ばがば」が如来となつてかえりみたとき、眼前にいるのは、もろもろの生ある者たち衆生であった。観察すると、衆生の心は底の見えない海のように、見えなるところをアーラヤ識と名づけるなら、そのアーラヤ識の表には、海の波のように見える七つの識が、風に吹かれて動く波のように、対象世界の変動に随って、荒れくるっていた。

「ばがば」の如来への転換は、アーリヤンの世界で師と尊ばれかつがれた人が、真に世界を導く尊き師にかえつたにすぎない。しかし、世界を導く尊い師を「ばがば」なるシンボルに閉じこめることによって、人間を神の子と悪魔、帝王と奴隷……として差別してきた人たちにとっては、大海に暴風雨がすさぶように感ぜられたろう。

「ラーマーマナ」第一篇24、ラーマと弟ラクシュマナがヴィシュヴァーミトラ仙に導かれ羅刹退治に出発、ガ
ンジス河を渡ることを次のようにいう。

そのとき、河の中流にさしかかると、浪の動揺につれて高くなる音を聞いた。：：ラーマは：：この声の目
的を知りたいと思った。：：「この波立ちさわぐ水の騒々しい音は、何でしようか。」：：聖仙はその声の
目的を話した。「ラーマよ、曾てブラフマー神は自分の意志で（マナサー）湖を造られた。その故に、マー
ナサ湖といわれる。神聖なサラユト川はこのブラフマー神の湖から出てアヨーディヤの街のそばを流れて
いる。水の動きからおこる、他にたとえようもないこの音は、サラユト川がガンジス河に合流する音だ。心
を専一にして、礼拝せよ」

出発にあたっての渡水、その水の音、はインドの古俗と関わるのではないか。同じ篇38 / 44はサガラ王とその
子らの物語、45は乳海についてである。

ヴィシュヴァーミトラ仙は聖仙の集団をつれて、河を渡った。向う岸につくと、聖仙の群れに厚く礼を言い、
ガンガー河の岸に上ると、都城ヴィンシャラが見えた。そこでこの勝れた聖仙はラーマと一緒に、：：天国
さながらの都城ヴィンシャラに赴いた。：：ラーマはこの都について尋ねた。聖仙はヴィンシャラに関する
昔話をした。

神代に女神ディティの息子（ダイティヤ）女神アディティの息子（アーディティヤ）たちが、不死になるた
め、乳海をかきまぜ靈液（ラサ）を手に入れようと思い、竜王ヴァースキを綱とし、マンダラ山を棒として

一千年乳海をかきまぜたとき、縹の蛇が石をかみ、その頭から猛毒を吹き出した。ハローラハラというこの毒は神・人・アスラを含め全世界を焼こうとする。神々はシャンカラ（シヴァ神）に助けを求め、ハリ（ウイシュヌ神）が姿を現わしルドラ（シヴァ神）にこの毒を供養として受けとるようすすめ、ハラ（シヴァ神）はハローラハラ毒を甘露のように飲み干しカイラーサ山に帰った。神々やアスラが再び乳海をかきまぜ：：一千年たつとアプサラス（天女）が現われた。水中（アプス）をかきまぜて生じた^{ラサ}靈液から出たのでアプサラスと呼ばれる。ヴァルナ神の娘のヴァールニーが現われた。デイテイの息子はヴァールニーをめとることができず、アデイテイの息子がめとった。そのためデイテイの息子はアスラといわれ、アデイテイの息子はスラと呼ばれる。最後に不死の靈液の甘露が生じた。アデイテイの息子たちは甘露を獲得しようとしてデイテイの息子たちを殺した。アスラ達はすべて羅刹たちと同盟し、大戦争が起こり、すべてが滅び去ったとき、ウイシュヌ神は魅惑する女マーマヤ（「幻」の意）の姿となり、甘露を奪い去った。アデイテイの息子たちがデイテイの息子たちを殺した。デイテイのヘアデイテイ？の息子たちを殺した後、ブランドラ（「要塞の破壊者」の意。インドラ神）は王位に即き、聖仙ならびに天上の楽人も含めた世間を、心も晴ればれと統治した。（岩本訳を節略）

この話は「びるしゃな」「アスラ」の章と読み合わせれば互いに参考になるだろう。「ラーマヤナ」と楞伽經、ことにその請仏品とは関わりが深い。ところで請仏品に出てくるラーヴァナは、「ラーマヤナ」以前のラーヴァナであろうか、「ラーマヤナ」以後のラーヴァナであろうか。この問題を次号で考える。（10月26日）

部屋の寒い／夜永にカーテンをしめました／悔しいことにさやさや／つれない雨風が／夜さり玉の肌をきず
 つけました／貴妃の酔った頬／のようでもなく／孫寿のひそめた眉／のようでもない／韓どのの移り香／徐
 さまのおしろいだって／とてもくらべものにならぬめずらしさ／よくみれば／屈原や陶淵明／のおもむきに
 びったり／そよ風に／かおりふうわり／野バラに劣りません／／秋が深むにつれ／すがすが瘦せ／かぎりな
 く人をしたう／漢の川べで帯解いて／見つめるみたい／白絹のうちわに詩を書いて／涙ぐむよう／月にすず
 風／けふる夜の雨／うつくしい姿もやつれてゆくのが天命／いとしんだとて／これから幾とき／留どめるこ
 とができません／人のところが／なんでいまさら想いましょう／沢のべや東のまがき

「白菊を詠ず」という副題がついている。ある本では「蘭菊」と題する。菊をうたったものに違いないが、中
 年すぎて、夫の愛のさめたのちの悲しみを詠唱するもの、とすでに人がいい、たしかにそのように読める。一三
 九字。前段六平韻、七四字。後段五平韻、六五字。かなり長い詞である。

小樓寒

Xiǎolóu hán,

夜長簾幕低垂。

yè cháng lián mù dī chuí.

二階の小部屋が寒く、ながあいながい夜。といつても、まだ秋で、冬の夜永ではない。この婦人が、愛してく
 れる夫（あるいは恋人）とともにいるのであれば、部屋は寒くもなく、夜は長くもないであろう。おのれの孤独

をいたわるようにカーテンをとさした。朝になって庭に出る。

恨蕭蕭、

Hèn xiāoxiāo

無情風雨、

wúqíng fēngyǔ,

夜來採損瓊肌。

yèlái cǎisǔn qióngjī.

まあ、ひどい！ さつさつとゆうべ一晩吹いた風ふつた雨に、大事にしていた菊の、玉のような花むらが、すっかり痛めつけ傷つけられていた。(大事にしていた、といいながら、昨夜はおのれのさびしさ寒さに、カーテンをしめるときにも、菊のことなんぞすっかり忘れていた。)

この詞の副題が「白菊を詠ず」であることはさきに行った。ところで「瓊」は赤い玉である。白い菊も霜にいたれば赤味は帯びるが、「瓊肌」は傷む前の花をさすのであろうから、白菊と限定せぬ方がよく、この副題は後人の加えたものかもしれぬ。その菊は、

也不似、

yě bú sì

貴妃醉臉、

guìfēi zuìliǎn,

也不似、

yě bú sì

孫壽愁眉。

sūnshòu chóuméi.

酒に酔った楊貴妃の頬のようではもちろんなく、孫寿のひそめた眉のようでもない。唐の皇帝が李正封の牡丹をうたった「天香夜染衣、国色朝酣酒」の句に感心し貴妃にむかって「おまえがたっぷり一杯やって鏡にむかった

ら正封の詩が見えるよ」といった。「松窓雜録」という本に見え、この話は京劇にもしたてられ、梅蘭芳の濃艶な演劇が有名だった。話に出る皇帝は玄宗ということになっているが、百年ほど後の文宗だとする説もある。孫寿は、後漢の梁冀、日本でならさしずめ平清盛、の妻でデカダンな姿態の美人でしかめた眉、泣いたような化粧をし時代のファッションとなった。

韓令偷香、

Hánlìng tōuxiāng,

徐娘傅粉、

Xùniáng fùfěn,

莫將比擬未新奇。

mò jiāng bǐnǐ wèi xīnqí.

晉の武帝の宰相賈充の下僚に韓寿という美青年がいた。充の娘が見染め、女中の手引きで、寿は高塀を越え、娘と会った。娘は浮きうきしてしきりに化粧しだす。充がおかしいなと思って、部下の話に気をつけていると、ちかごろ韓寿のやつ、いい匂いをさしているぜ。そのころは誰だって衣に香をたきしめた、普通の香ではうわさになるはずがない。さては、と思った。さきごろ西域から皇帝に名香を贈った。皇帝は充ともう一人の重臣にだけわけてやった。ほかにはそんな香はないのだから、むすめがあいつに、と勘づいた。門はなん重にも閉め、どの塀も高くって来られるはずがない。とは思ったが念のため調べさせたら、東北の角に足跡みtainのがあります。人が越せるところじゃありません。やっぱりあいつだ、と充は娘付きの女中を問いつめ、事情がわかると、世間に聞こえぬうちに、寿と娘を結婚させた。「世説新語」に見える。韓寿は下僚だったから知事にあたる筈」ではない「據」とすべきだろうと王学初氏がいう。その方がよいようだ。次に出てくる「陶令」との釣合でも。

同じ「世説」に次の話がのっている。魏の何晏はハンサムで、顔がたいへん白い。明帝は、それをおしろいをつけてるのではないかと疑っていた。真夏にあついワンタンをごちそうした。食べて、大汗をかき、朱衣でぬぐうと、さらに輝くばかりだった。ただ「徐娘」とは関わらない。梁の元帝の妃の徐氏は、美人だったが、帝が片目だということで帝が部屋に来ると聞くと顔半分だけ化粧し、大酒のみ、次々に愛人をつくったりした。そのひとりが「柏家の飼い犬は老いても猟がうまく、蕭家の馬は老いてもよく走るが、徐おくさんは老いてなお多情だ」と感嘆した、という話が「南史」に見える。「徐娘」はたぶんこの徐妃で「おしろいをつける」こととはつながりにくい、が、「半面粧」をかけたのかもしれない。

ここでは韓寿の香だつて徐妃の化粧だつて、この菊の新奇さとはくらべものにならぬ、というのである。

細看取、

Xì kāngqǔ

屈平陶令、

qūpíng táolíng,

風韻正相宜。

fēngyùn zhèng xiāngyí.

この菊のめずらしさは、しみじみと見入る人には、「離騷」の屈原、「掃去來の辞」の陶淵明その人の風格にまさるにびつたりだ、ということがわかるだろう。

微風起、

wēifēng qǐ,

清芬醞藉、

qīngfēn yùnjíe,

不減餘醞。

bùjiǎn yúntún.

微風がおこる。清らかな香りがつつましくただよう。それはあの野バラにも決しておとらない。以上前段。

漸秋闌、

Jiàn qiū lán

雪清玉瘦、

xuě qīng yù shòu,

向人無限依依。

xiàng rén wúxiàn yīyī.

だんだん秋がたけてくる。それにつれて菊は清らにやせてゆく。雪や玉は飾りことばだが、白菊の形容としてならびつたり。どうも前段の菊は黄花や紅花のイメージがうかび、後段では白花にしぼられているように、わたしには感じられる。いうまでもなかるうが、いずれにしても野生の小さな菊、あるいはそれに近いもので、近代のあつもの咲き等では決してない。そのすがすがとやせた菊が人をこいしたうようなすがたでなよやかに。

似愁凝、

Sì chóu níng

漢皋解佩、

Hàngāo jiěpèi,

似淚洒、

sì lèi sǎ

紈扇題詩。

wānshàn tíshī.

それは漢水のほとりて鄭交甫におび玉を解いて与えた神女の眼差しのようでもあり、あのあわれな秋の扇の詩をよんだ班婕妤の涙にも似ている。神女の話は『列仙伝』に出ていて小林太郎『中国絵画史論考』にくわしい解説があり、班氏については拙著『中国名詩選』を参照していただければ幸いである。

朗月清風、

Lǎngyuè qīngfēng,

濃煙暗雨，

nóngyān ànyǔ.

天教憔悴度芳姿。

tiān jiào qiáocuì dù fāngzī.

あかるい月、すずしい風、濃い霧、暗い雨。秋はさまざまに趣きふかい景物をもたらすが、そのひとつひとつが天からの贈りものであり、同時に、菊におとろえをもたらしその美しく香ばしい姿を過去に送りつける天の命令なのだ。

縱愛惜，

zòng àixī

不知從此，

bùzhī cóng cǐ,

留得幾多時。

liúde jǐduō shí.

よしどのように愛惜しても、これから、どれだけの間、この菊を引きとめておくことができよう。

人情好，

rén qíng hǎo,

何須更憶，

hé xū gèng yì,

渾畔東離。

hún pàn dōng lí.

人の好み、こころは移ろうものだ。まして色も香も失い、ほろびようとすることを、ベキラの淵のほとりを、山の見える東のまがきを、いまさら誰が想いおこそう。

源は中国のひとつであり、その国の伝統文学にいちじるしい、おのれの不幸は世間のせい、相手のせい、とする傾向は見えるが、この詞には、その「せい」のなかに、おのれをも含め、作品の奥行を深めている。(10・30)